

スピーカー: カリブベク・クユコフ / ATOMプロジェクト、カザフスタン

アーティスト、ATOMプロジェクト名誉大使

7月18日1968年にセミパラチンスク核実験場から100km離れた場所にあるイエギンディブラック村に生まれる。

ご両親は核実験の生存者。父は運転手として、何回も核実験が行われた地区を通い、母は大きな光の後、夜のように暗くなった場面を目撃。

クユコフ氏が生まれる前に両親は2人の子どもを授かったが、2人とも1歳まで生きることがなかった。クユコフ氏が生まれた際、母親は生まれてきたクユコフ氏に3日間近づくことができないほどの大きなショックを受ける。医者は注射を父に薦めたが、父親はそれを拒絶した。

1989年にセミパラチンスクで反核運動を開始。クユコフ氏の絵画は日本、米国、ドイツ、トルコで展示される。2013年よりATOMプロジェクトの名誉大使。

カザフスタン初代大統領基金がお送りします。

"核の土地 "アトミックランド"、ソ連の最初の核実験が行われた場所です。ここでは500回におよぶ核爆発が行われてきました。人々が暮らし、子どもたちも生まれる場所です。冷戦では主力兵器として核兵器の開発が進みましたが、犠牲になったのは人々でした。

当時の私たちはただの田舎者で、冷戦が何を意味するのかを理解していませんでした。私たちはアメリカ人は敵だと言われ、アメリカ人は世界征服をしたいのだと信じ込まされたのです。アメリカが核兵器を持つのであれば当然ソ連も持つべきだと。核爆発がある度に何百もの命が傷つきました。何千もの子どもたちが、生まれつき苦しむ宿命を背負わされました。この世界で核の恐ろしさを経験したことのある国は日本とカザフスタンの二国のみです。核の犠牲が出続けるこの状況に、誰かが終止符を打たなければいけません。世界のあらゆる場所に非核兵器地帯をつくる必要があります。

医師達は私の人生を終わらせるという選択肢も提案しました。しかし父はそれを拒みました。父は私のことをみつめ、「連れて帰る」と言いました。そのため私は生き続け、家族と暮らすことができました。

軍が現れ、人を連れ去ることもありました。どこかに連れて去られていました。核実験が終わるとその人たちは戻ってくる。連れ去る人たちはガスマスクを着用し、特殊な制服を身につけ、村民は何が起きているかわかりませんでした。その後、家に帰されウオッカを100g与えられるんです。放射能からウオッカが守ってくれると言われていました。村民が家に帰ると、鶏が全羽死んでいました。他の鳥も死んで地面に落ちていました。犬も半分死んでしまい、残りの半分は毛が抜けている有様でした。とても異常な風景でした。ただ、想像できると思います。ソ連時代だったので、誰も何も言うことができませんでした。

核実験の歴史において、私が最後の被害者になるようにこれからも活動が続けることが私の使命だと思います。核の脅威が繰り返されないように。新しい世代に、これから生きていく子ども達に対して胸を張れるように。

核の恐怖は人々にとっての恐怖で、母親たちが感じる恐怖です。セミパラチンスクで行われた核実験の影響で何千人もの子どもたちが障がいをもって生まれました。中には長く生きることができない子もいたしそうでなくても大変な苦しみを負いました。こんなに長い時を経た今でも、うまれたばかりの私を両親が病院でみたときどのような気持ちになったのか想像することができません。その時医者は両親に私のことは諦めるようにと言ったそうです。生きられる望みは薄いし、生きることができても一生苦しむから



と。だけど 父は耳を貸しませんでした。そしてそんな両親に私は今とても感謝しています。放射線を浴びたことでたくさんの方が遺伝子異常に苦しむことになりました。科学者は、核爆発の影響は世代を超えと言います。私はたまに「歯を食いしばって人生にしがみついている」と言うんです。まさにその通りに生きてきました。でも、私はヒーローではありません。何が起きても決して絶望せず、闘うことが大事です。人生とはそういうものだと思います。

かつて世界で4番目に大きい核軍備を誇っていた国が非核化をすると決めたことがどれだけ重大な決断だったか、今改めて感じます。私は核実験の全面的な禁止を望んでいます。世界に見本を示してほしい。そして、他の国は一丸となってそのプロセスを保障していくべきです。

20世紀、私たち人類は世の終末、最後の審判、そして世界の終わりの寸前まで近づきました。核の狂気が地球上を覆っていた時代です。野心的な政治家が互いをにらみ合い、人々が核の冬を待っていた、そんな信じられない時代です。80年代の後半には核実験場の埋め立てが緊迫した課題となりました。想像してみてください。目の前でソ連が崩壊し、みなが透明性や民主主義を語りだしたんです。そのような状況にも関わらずカザフスタンでの核実験は続きました。軍が実験を止めたくなかったからです。

疲れ果てた母親は病气持ちの子どもを産み続け、大地も力尽きました。私たちは長いこと沈黙を貫いていましたが、誰かが最初の声を上げた。そしてその声が次々に他の人の声を呼び集めたのです。どんな政治家でも核兵器の誘惑に取りつかれることがあります。そして25年経って、正しいのは核兵器を完全になくすことなのだと気づくのです。

21世紀の最大の目標は核兵器のない世界を実現することであるべきだと私は訴えたい。新しい世代の子どもたちはもう私たちと同じ運命をたどる必要はありません。きっと違う未来を生きられる。なぜなら私たちはもう違う「現在」を歩み始めたのですから。

おことわり

この文章の責任は証言動画の文字起こしを行ったピースボートにあります。オリジナルの証言と完全に一致するとは限りません。オリジナルの証言は2021年12月3日(日本時間)に行われた世界核被害者フォーラム2021にてオンラインで上映されました。このフォーラムはピースボート主催、核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)協力で開催され、世界5大陸から30名を超える参加者がそれぞれの核の被害を1000人を超える視聴者に訴えました。証言やパネルディスカッションの様子はYouTubeチャンネルまたはこちらのウェブサイトより閲覧可能です。<https://nuclearsurvivors.org>